

## 留学期の魯迅におけるイプセンの受容

陳 玲玲

### 1. はじめに

1908（明治41）年、清国留学生により発行された文芸雑誌『河南』において日本留学中の魯迅は、「文化偏至論」と「摩羅詩力説」という二篇の論文を発表した。魯迅はその中でイプセンについて触れており、これは中国語によるイプセンについて最初に<sup>1</sup>言及された文章だと言える。この二つの論文をはじめ、魯迅の留学中に書いた論文の材源、およびそれと日本明治時代との関係について、日本の研究者、たとえば北岡正子氏、伊藤虎丸氏、松永正義氏、中島長文氏が論文<sup>2</sup>を書いている。言うまでもなく、留学期魯迅のイプセン受容は、その当時日本におけるイプセン熱との関係が密接である。これについては、清水賢一郎氏が詳しく考証を行っている。<sup>3</sup>しかし、清水氏の考察は魯迅のイプセン受容について、明治期日本におけるイプセン熱との関係に注目がおかれており、中国の当時の社会的状況にその受容の原動力を探求するものではない。

本篇では魯迅がニーチェとキルケゴールとともにイプセンを紹介している点に注目して、留学期魯迅のイプセン受容の内容を考察する。それによって魯迅が西洋文化を選択し、批判する過程において表した強い個性を、浮かび上がらせたいと思う。その上で魯迅の個性がいかに形成されたかを、中国伝統文化との関係の中から追求したい。

### 2. 魯迅のイプセン受容及びその特徴

魯迅は1902（明治35）年から1909（明治42）年まで、21才から28才までの青年時代を日本留学生として過ごした。最初、日本への留学は魯迅にとって「異なる道を行き、異なる土地へ逃れて、別種の人々と交わりたい」<sup>4</sup>という夢のつづきであった。それは元々<自救>すること、言い換えれば、<個人的な革命>を意味したものである。魯迅の留学期、日本は明治維新を経て強大化し、更に日清戦争後、日本人の中国人に対する蔑視は強くなっていた。魯迅の心に

は民族主義が強まり、「中国民族に最も欠けているのは何か、その病根はどこにあるのか」という問題を、親友許寿裳と繰り返し討論した。<sup>5</sup> 仙台医専時代に、ノート検査事件と幻灯事件<sup>6</sup>に刺激を受け、魯迅は医学を学んで、漢方医、迷信の害から中国人を救うと共に中国の「維新」に貢献したいという「美しい夢」から目醒め、「人々の精神を改革する」<sup>7</sup>ための文学へと転向し始めた。

1906（明治 39）年春、魯迅は仙台医専を中退して東京に戻る。間もなく日本ではイプセンの死が契機になって、イプセン・ブームが日本に沸き起った。7月、魯迅は一時帰国、母の意志により朱安と結婚し、数日にして、弟周作人を伴い再び渡日した。その後独逸学協会のドイツ語学校に在学していたが、もっぱら文学を研究していた。周作人によれば魯迅がイプセンを読んだのはこの時期であったということである。<sup>8</sup>これは彼の残した 2 篇の論文「摩羅詩力説」、「文化偏至論」からもうかがえる。

1907（明治 40）年東京で書き上げられていた「摩羅詩力説」、「文化偏至論」はもともと雑誌『新生』を出版するために作った文章であった。そこには魯迅の最初の文芸理想が含まれている。彼は「摩羅詩力説」の中でイプセンについて次のように述べている。

「やせた土地から、われわれは何を収穫することができるだろう。（中略）あらゆる事物は、慣習という、極めてあやふやな衡によって左右されている。世論なるものは、実に大きな力を持っているが、その世論の闇が地球全体を蔽っている。」このバイロンの言葉は、近世のノールウェイの文学者イプセンの見解と正に一致している。イプセンは近世に生まれ、世俗の昏迷を憤り、真理の輝きがかくれていることを悲しんで、「社会の敵」を借りてその主張を述べた。この戯曲全篇の主人公である、医師ストックマンは、あくまで真理を守って、愚劣な俗人ばらに反対し、結局、民衆の敵という悪名をつけられた。彼自身、土地の人々に追い立てられた上、その子も学校から排斥されるのだが、彼はあくまで奮闘して、いささかも動揺しなかった。そして最後でこういつている。「私は、また真理を発見しました。地球で一番強い人間は、独りで立っている人です。」イプセンの人生に対する態度もこれと同じであった。（『魯迅選集』第 5 巻、岩波書店 1986 年 p59）

魯迅はここでイプセンの戯曲「社会の敵」を例に挙げて、バイロンが自由のために、真理のために、「力戦して斃れても、精神は決して斃れなかった。敵

に打ち勝つまでは、あくまで戦いを止めなかった」、「ついに社会を敵として顧みなかった」と述べている。即ち魯迅はバイロンが地球上で最も強い人間で、最も独立した者であるという彼の観点を説明、強調していると思われる。つまり魯迅が感服しているものは、「社会の敵」におけるストックマンのような人生に対する態度であった。なぜなら、それこそが当時の中国人に最も欠けているものだからである。

魯迅はまた「文化偏至論」の中で3度にわたってイプセンに言及している。

次に、デンマークの哲人キルケゴールは、激しい憤りを発して、個性を発揮することのみが、至高の道德であって、その他の事を顧みるのは、すべて無益である、と喝破した。その後、ヘンリック・イプセンが文学の世界に登場し、その卓越した文才と識見によって、キルケゴールの注釈者と称せられた。彼の作品は、しばしば社会民主の傾向に逆行し、精力のほとばしるところ、習慣、信仰、道德の区別なく、かりにも見聞が狭くて偏至しているところがあると、これに対して非難攻撃を加えた。さらに、近頃の世の中を見るに、つねに平等の名に託して、実はいよいよ醜悪汚濁に向かって行く。卑俗と軽薄は日ましに深まる一方である。頑冥愚昧と虚偽譎詐とが、どこへ行っても幅をきかせている。しかも気宇においても品性においても、俗人どもよりはるかにすぐれた人物は、かえって草間に埋もれ、泥塗に辱しめを受けている。個性の尊厳も、人類の価値も、まさに悉く烏有に帰そうとしている。彼はこうした世の様を見るごとに、慷慨激昂して、自ら禁じ得ないのであった。たとえば彼の戯曲『民衆の敵』であるが、ある男が真理を大切に守って、世俗に阿らぬために、社会に容れられない。そこで、狡猾な連中が、愚昧な民衆の、あっぱれ指導者になって、多数の力を笠にきて少数者を侮り、徒党を組んで私欲を遂げ、そこから闘争が起るというところで、戯曲は終わっている。そこには社会の相が、ありありとあらわれている。(前出、p21)

ニーチェやイプセンなどの人々は、その信念に基づいて、あくまで当時の世俗に反抗し、主観傾向の極致を示した。(前出、p25)

ニーチェの理想としたものは、世に絶した意志の力を有する、ほとんど神に近い超人であった。イプセンが描写したのは、改革をもって生命とし、力強く闘争的で、幾万の民衆を敵に廻しても怖れない強者であった。(前出、p26)

ここで魯迅はイプセンを人間の価値、個性の尊厳を説き、社会の醜悪を暴く作家としてとらえている。

これら2本の論文においてイプセンに言及した引用文からも、次のような特色がうかがえる。

- (1) イプセンはキルケゴールの解釈者と称されている。
- (2) イプセンの作品のなかで「社会の敵」（「民衆の敵」）だけを繰り返して挙げている。
- (3) イプセンはニーチェと共に、意志の力を有する世俗に反抗する代表であるとされている。

これらは魯迅のイプセン像が、日本明治期のイプセンの色彩を帯びていると言う、清水賢一郎氏の見解と共通しているように思われる。しかしながら、私は同時にそこには魯迅の個性が明らかに表されていると考える。また、上の三つの特色以外に、譚国根は「魯迅にとってイプセンは、劇作家としてよりもっと重要なのは社会批評家である」と指摘している。<sup>9</sup>しかしこれは魯迅だけでなく、おそらく中国の初期イプセン受容においても同様であると思われる。

以下、以上の3点について論ずることとする。

### 3. 特徴(1)〈イプセンはキルケゴールの解釈者と称されている〉点について

清水賢一郎氏の指摘によれば、魯迅は齊藤野の人の「イプセン（明治時代イプセンの訳、以下同じ―陳注）の「ブランド」を評す」<sup>10</sup>を目撃した可能性が少なくないという。齊藤野の人は同文章において「個人主義の哲学を唱導」していた「キールケゴールド（明治時代キルケゴールの訳、以下同じ―陳注）なる冥想的なる哲学者」に触れ、「蓋しイプセンは彼の感化を受けたるもの、『ブランド』は実にキールケゴールドの哲学の詩的表現と云ふべき也」と述べている。これは(1)の根拠だと清水賢一郎氏は指摘している。

(1)については、もともとブランデスの『ヘンリック・イプセン』の中で、その「第一印象」で次のように述べている。「「ブラン」（「ブランド」の訳、以下同じ―陳注）におけるほとんど全ての主要な観念はキルケゴール（キルケゴールの訳、以下同じ―陳注）のうちに見いだされ、その主人公の生涯はキル

ケゴールのうちにその原型をもっている。実際、イブセンはキルケゴールの詩人と呼ばれる榮譽に憧れているかのようにすら見える」と。<sup>11</sup>『ヘンリック・イブセン』の英訳<sup>12</sup>は1899（明治32）年に出版された。その7年前（1892）『早稲田文学』で坪内逍遙がブランデスを典拠にイブセンを紹介していた。<sup>13</sup>1906（明治39）年『早稲田文学』イブセン号には島村抱月が『イブセンの伝』でブランデスをイブセンの「第一の知己」また「イブセンの発見者」と称し、ブランデスのイブセンについての「第一印象」、「第二印象」、「第三印象」に関する評論文が収めてある『ヘンリック・イブセン』を紹介している。同誌で上田敏はさらに詳しくイブセンの世界観、特に劇詩「ブラン」とキルケゴールの哲学の関係を論じている。

劇詩「ブランド」は殆ど全く此丁抹<sup>14</sup>哲学者の世界観を含でいると云っても宜しい。（上田敏「イブセン」『早稲田文学』1906年7月）

イブセンは極めて真面目に、自己の世界観或はキルケゴルドの説に基いた自己の説をのべたのである。（前出）

(1)の観点を述べるときに、齊藤野の人と上田敏はイブセンの「ブラン」に言及している。「ブラン」の最初の邦訳は、1901（明治34）年までさかのぼる。つまり高安月郊により東京専門学校出版部から出版された『イブセン作社会劇』の中で、「ブラン」は「ブランド」の名で翻訳がなされた。1903（明治36）年、鷗外は「牧師」で「ブラン」をレクラム文庫版から訳出したこともあるが、未完に終わっている。<sup>15</sup>また1907（明治40）年阿部次郎がブランデスの「イブセン」の英訳を要約紹介している。後に1914年に入って、「ブラン」の全訳が出版された。そのため、上の(1)についての観点は魯迅がブランデスの『ヘンリック・イブセン』を参考にした可能性が高いと思われる。

周作人によれば、魯迅は日本の文学に対しほとんど興味がなかったが、ただ夏目漱石に感服し、そのほかには、長谷川二葉亭と上田敏などの名前を挙げたということである。<sup>16</sup>したがって、魯迅が上田敏の「イブセン」<sup>17</sup>を読んだ可能性が考えられる。

一方、ブランデスの『ヘンリック・イブセン』の独訳の出版年について、次のような推測もできるのではないだろうか。

①東京大学附属図書館に収蔵された本。

Henrik Ibsen / von Georg Brandes (Die Literatur : Sammlung illustrierter Einzeldarstellungen ; Bd. 32. 33) Berlin: B. Marquardt (19--)

②Brandes, Georg (Hrsg): Henrik Ibsen. Sammlung illustrierter Einzeldarstellungen. In: Die Literatur, 32/33.Bd., Berlin o. J. (1905?)

<http://ellen-key.paed.com/key/h/key6b.htm>

③Ibsen, Henrik- Brandes, Georg: Henrik Ibsen. Mit 12 Briefen Henrik Ibsens. Bard - Marquardt, Berlin (1906) Orig. Pergament, 12x16 cm, 280 Gramm, 125 Seiten, Zustand: 3 (32. Band von Die Literatur, Sammlung illustrierter Einzeldarstellungen. Mit 17 Vollbildern und 4 Faksimiles. Schöner Jugendstilband, leider etwas angeschmutzt) ... Best-Nr.: 34110-h ... Preis: 8,- Euro (plus 0,95 Euro Inlands-Versandkosten; incl. 7,00% MwSt.)

<http://www.antiquariat-drummer.de/antiquariat/R814.HTm>

④Ibsen - Brandes, Georg, Henrik Ibsen. Mit zwölf Briefen Henrik Ibsens. (= Die Literatur, Bd. 32/33). Berlin, Bard-Marquardt (um 1908) . Kl.-8°. (4), 118, (8) S., 15 Tafeln u. 4 Faksimiles, flexibler Ganzpergamentbd. mit Goldpr. u. Goldschnitt (etw. nachgedunkelt, die Schließbänder fehlen). Gutes Exemplar in der besten Einbandvariante. EA. <Best.-Nr. 63018A> 24,- EUR

<http://www.antiquariat-loidl.de/49/01.htm><sup>18</sup>

以上のように 1905 年、1906 年、1908 年、3 つの出版年の本が存在している可能性があり、魯迅がそのいずれかの独訳『ヘンリック・イブセン』を読んだ可能性がある。その当時、彼はドイツ語を通じて欧州の弱小民族の文学を理解し、ブランデスの本を漁っていた。<sup>19</sup> 中国の研究者黄喬生氏は、魯迅が東京ですでにブランデスの『ヘンリック・イブセン』（評伝、イブセンからブランデスへ手紙 12 通を付けている）を読んだことがあると指摘する。<sup>20</sup>

また、(1) について、中国の研究者魏韶華は次のように述べている。

個性のあるいかなる作家も外の作家の影響を受けるとき、全部を納得するのではなく、自己の個性と自分の文化環境により選択的に吸収している。魯迅はイブセンに対してこのようにし、彼はイブセンの重要な側面を強調した。即ち『民衆の敵』の中に現れる精神の面、言い換えれば、「個性を尊敬し、精神を高揚する」という側面である。これはキルケゴールの色彩を帯びるものである。魯迅はまさしくキルケゴールの精神の道筋に沿ってイブセンの精神の広場に入る。<sup>21</sup>

以上のように、確かに魯迅はキルケゴールに大いに興味を示したことがわかる。彼は日本留学期間においてドイツの Frommann 出版社から出版された『古典的な哲學家叢書』の第3巻「ソレン・キルケゴール」、第6巻「ニーチェ」、第10巻「ショーペンハウア」を購入していた。これは形而上学の哲学著作ではなく、伝記である。その外キルケゴールの『誘惑者の日記』と『ソレン・キルケゴール及び彼と彼女の関係』も購入していた。<sup>22</sup>

枅形公也氏は「日本におけるキルケゴール受容史」<sup>23</sup>のなかで、「明治時代におけるキルケゴール受容のいま一つのルートはブランデスによるイプセン紹介である」、と述べている。1901（明治34）年「美的生活論戦」の中で、イプセンの「ブランド」が注目されるようになり、キルケゴールの色彩を帯びているブランドの台詞、「一切か、しからざれば、無」に対して、当時の知識人達は大きな共感を寄せた。主人公ブランドの生涯はキルケゴール自身からその原型が由来している、とブランデスは指摘していた。故に、イプセンとの関係でキルケゴールに興味を持たれたのである。

明治のイプセン・ブームと比べて、キルケゴールの紹介は少し遅れ、1906（明治39）年9月になると『早稲田文学』第3第9号に金子筑水の「キルケゴールド（キルケゴール—陳注）の人生観」が掲載される。日本において第1次キルケゴール・ブームが起ったのは、1930年（昭和5年）以後のことであり、論文、翻訳が出版されるようになった。雑誌では『理想』が1936（昭和11）年の11月号で「ニーチェとキルケゴール」の特集号を出している。『早稲田文学』イプセン号より30年遅れている。それについて、姚錫佩氏は次のように述べている。

当時（魯迅留学期の日本明治時代）の日本ひいては欧州でキルケゴールに対する紹介が多くなく、明らかに、魯迅はよく知っているブランデスの『ヘンリック・イプセン』によって後に実存主義哲学の先駆と呼ばれたキルケゴールを理解した。<sup>24</sup>

（1）に関連して、1907（明治40）年までの日本におけるイプセン受容の特色の一つとは、外国雑誌<sup>25</sup>と書籍からブランデスのイプセン観を間接的に移入し、直接イプセンの作品「ブラン」を紹介したものではなかった、ということである。その背景下で、魯迅はブランデスの考えを受け入れ、イプセンの作品とブランデスの論著を漁って読んだり、キルケゴールと比較し、遂にブランデ

スのイプセン観を認めていると言える。さらに魯迅は自身の考えに基づいて、「文化偏至論」、「摩羅詩力説」において、日本の知識人からよい評判を得られた「ブラン」ではなく、「社会の敵」をイプセンの代表作として繰り返して挙げていた。この点については次節において言及したい。

#### 4. 特徴(2)〈イプセンの作品の中で「社会の敵」(「民衆の敵」)だけを繰り返して挙げている〉点について

魯迅は「社会の敵」をイプセンの代表作として、しかもこれによって「キルケゴールの解釈者」のイプセンを論じている。これは当時の日本の知識人と異なっている。日本の知識人、例えば高山樗牛、齊藤野の人、上田敏博士達はブランドスにより、「ブラン」からキルケゴールの哲学を読み取っている。つまり、ブランドの「譲歩、妥協、調和等の都合宜い考は毛頭無い」、<sup>26</sup> 勇猛不退転の意志がキルケゴールの中心思想 — 美的生活を棄て、倫理生活を選び、孤独の人になって精進すること、すなわち神人合一の宗教生活に入る — を含んでいるとする。これに対して魯迅は彼独自の読み方をあげている。彼は中国伝統文化、特に儒家の中庸主義、平均主義の下で個別性が圧殺され、とりわけ才能の非凡な人が自己肯定できないという弊害<sup>27</sup>を深く感じた。<sup>28</sup> だからこそ、魯迅は、イプセンの「社会の敵」の中でストックマンが真理を守るために「民衆の敵」という悪名をつけられても、義として後へはひかず、あくまで奮闘して、いささかも動揺しなかったような強い自己肯定精神に感心したのである。ストックマンの次のような台詞が当時の魯迅の目を覚まさせたのだといえる。

われわれの中における真実と、そして自由の何よりも危険な敵は、それは、あのガッチリと団結した多数派です。(「人民の敵」(「社会の敵」と「民衆の敵」と同じ劇作—陳注)『イプセン戯曲全集』第3巻、P234)

多数派は、決して正義の味方なんかじゃありません。決して！それは、社会的迷信の一つです。自由で、思慮ある人間が打破せずにはおれないね。[中略]多数派には力があります、——不幸にして——、しかし、正義は持っていませんからね。正しいのは、わたしと、そして二、三の人びとです。少数派が常に正義の味方です。(前出、P235)

真理はどこまでも多数派のものだというその嘘に対して、わたしは、革命



を起こすつもりだよ。いったい、どんな真理をその多数派は担ぎまわっていますかね？ 彼らが担ぎまわっているのは、古びて通用しなくなった昔むかしの真理じゃありませんか。真理もそこまで古くなると、立派な嘘になるんですよ、（中略）そういう多数派の真理真実は、みんな古臭くなった塩漬けの肉のようなものです、——腐敗して、カビの生えたハムのようなものです。しかも、社会に蔓延しつつあるあの道徳的壞血病は、みんなここからきているのです。（前出、P236）

あの大多数、あの呪うべきガッチリ団結した多数派、——それこそが、いかね、われわれの精神生活の源泉を腐敗させ、われわれが立っているこの地上を、病毒で汚染しつつある元凶だ、って。（前出、P236）

魯迅は、ストックマンの精神とキルケゴールの自らの実存過程においてその個別性を確立するという個人主義との内在的一致を見た。

魯迅が読むことができた、つまりその当時日本で出版されていて、また紹介されているイプセンの作品は20部に達している。その中で「ブラン」、「社会の敵」、「人形の家」は大きな影響力を持っていた。「ブラン」に日本人の注目が集まった所以は、ブランデスがそれとキルケゴールの関係を何回も繰り返して論及していたからであるかもしれない。「社会の敵」は日本において最初に完訳され、最初のイプセン劇の上演として舞台にかけられた作品である。これは当時の国家と政治の季節との関係が深いと言える。<sup>29</sup>「人形の家」は一番目にイプセンの劇として日本に紹介され、<sup>30</sup>「社会の敵」と一緒に最初に完訳された。しかも1906（明治39）年2月『時代思潮』に掲載された桑木巖翼の「近世戯曲と人生」から引き起こされた論争をめぐって、ノラの「家出」を中心に女性解放という「社会問題」、具体的には、「倫理問題」が日本の近代社会において脚光を浴びていた。「人形の家」の中で、ヒロインのノラは夫が病気でイタリアへ転地するのだが、その費用は彼女の文書偽造を行い、夫に内緒で借金した。彼女はそれを誇りとしている。夫に対する愛情から、夫の命を救うために彼女はそれを行った。しかし、その夫は、常識の目で批判し、法律の側に立って、男性の目でこの状況を判断する。ノラは婚姻の虚偽を見、独立した人格となりえるために家出する。興味深いのは、結婚したばかりの魯迅が東京に戻って、そのような時代の空気の中で切実な問題である婚姻問題に対して意識せずに、全力で「人々の精神を改革する」運動の中に身を投じたということであ

る。

魯迅は徹底的に中国の封建的伝統に反対した戦士であるが、しかし、彼は封建家庭の中で成長しているうちに伝統文化の影響を受けたと思われる。これは魯迅が自分の写真に書き付けて許寿裳に贈った詩の中に手がかりが見える。

靈台無計逃神矢、風雨如磐闇故園。寄意寒星荃不察、我以我血薦軒轅。

心（靈台）は、日本で受けた様々の刺激（神矢）を逃れられない。風雨はいよいよ激しいが、祖国（故園）はなお闇にとざされている。遠く寄せる私の思いを、わが国民は察してはくれない。私は自分の血を、祖国に捧げるのみである。（丸山昇の訳による<sup>31</sup>）

詩の奥底に流れている民族の運命への関心は、伝統的な中国知識人の憂国憂民という思想感情と似ていると言える。さらに魯迅が医学を放棄して、文学へ志を変え、「文芸」を通じて中国の「人々の精神を改革」<sup>32</sup>しようという考えは、ある程度において中国の伝統的士大夫の指導者意識により生じたということができる。朱宗震氏は論文「士大夫の伝統は『五四時期』新青年に影響を与えてきた」の中で、士大夫の伝統、換言すれば伝統的士大夫教育によって「五四時期」新青年の知識構造は影響を受けていたと指摘している。すなわち理工や農商より、政治や人文科学の方が重視されていたのである。また、魯迅について、氏は次のように述べている。

彼の自然科学についての知識が彼の同時代人の中でより豊富だと言える。

（中略）彼は遠回りをしてしまってから（魯迅が洋学を学び、日本で医学を学ぶこと―陳注）、聖賢になり人の師となるという士大夫の指導者意識が知らないうちに彼の頭の中に浮かびあがり、（略）<sup>33</sup>

留学時代の魯迅は、「国民の自覚が生れ、個性は発展して、砂の聚まった国は、これにより一転して人間の国となるであろう。人間の国が建設される」、という理想を持った。その理想を実現するために、イプセンの精神界における戦士の姿が強調された。イプセンの作品においてもっとも戦闘性を持っているものは、無論「社会の敵」である。しかしその時、ノラの家出という行動の中における叛逆性、戦闘性は、魯迅にはいまだ見えていなかった。魯迅は気の向かない結婚によって受けた精神の傷手は大きく、新婚のはじめての夜、涙で青い捺染枕カバーをぬらしてしまい、翌日青い涙のあとが彼の顔に残っていたと

いう。<sup>34</sup>つまりこの結婚は彼にとって骨身にこたえる苦しみであり、口にするほどもできないような「禁忌」（中島長文の語<sup>35</sup>）であったのだ。結局彼はただ結婚式を挙げただけで、婚姻生活に全然入らず、その結婚について口をつぐんだ。中島長文氏の分析するとおり、魯迅の初期の文学は「伝統的な文学意識、儒教的倫理の枠から自由ではなかったよう」な「士大夫的性格」が表れており、「禁忌は彼にとって唯一の逃路であった」のである。<sup>36</sup>そのため、魯迅はイプセンの「社会の敵」に大いに興味を示し、それとは逆に、日本において同様に流行しているイプセンの「人形の家」に対して口を噤んで何も言わなかったのである。10数年を経て五四運動中、胡適が中心となってイプセンを紹介したことをきっかけにして、中国において「人形の家」熱を迎え、ノラは「新しい女性」の代名詞になった。その後これについて、魯迅は理性的な見識を持って冷静に批判し、小説「傷逝」（1925）を通じて具体的に中国「ノラ」の運命を明示している。この点については、本論文の内容とは、主旨が異なる為、別稿にて論じたい。

要するに（2）の点では、大いにイプセン受容についての魯迅の個性が表現されている。即ち魯迅のイプセンは、日本明治時代及び中国五四時期とも少しことなるところがある。その中に魯迅の強い主体意識と彼の個人経歴、更に個人的才能の要素がないがしろにできない。あたかも清水賢一郎氏が述べるように、1906（明治39）年5月末にその訃が伝えられて以来、日本は「イプセンの季節」ともいうべきイプセン熱の時代を迎えていたが、しかし魯迅によるイプセン紹介はまさにその渦中であって、日本の文学者と競合するかのようにして、<sup>37</sup>方向を異にして行われたものであった。魯迅は婚姻を題材とする「人形之家」について何もいわなかったが、「社会の敵」を激賞した。そこには、魯迅の士大夫的性格が表れ、伝統的士大夫としての憂患意識と指導者意識がうかがわれるのである。

### 5. 特徴（3）〈イプセンはニーチェと共に意志の力を有する世俗に反抗する代表とされている〉点について

これは当時の日本における文化背景によると言える。魯迅が日本に到着したその1902（明治35）年に、日本においてニーチェ主義が流行している。それは日清戦争後「物質の魔力に溺れむとする」ような日本の精神文明の危機に対して、高山樗牛を中心とする日本知識人がニーチェの個人主義と批判精神を唱導

している結果にほかならない。その中ではしばしばニーチェとイプセンがともに文明批評家として挙げられている。高山樗牛は「文明批評家としての文学家」の中で、「イプセンはニーチェと同じく個人主義の宣伝者也」、「吾人は我邦文学者に勧めて強ちにニーチェ、イプセンの先蹤を履ましめるとするものに…」、<sup>38</sup> という。また、斉藤野の人の「イプセンとは如何なる人ぞ」において、「この如く崇高なる 19 世紀の個人主義の最後の預言者としてニーチェ、ワッツ、トルストイ及びイプセンは現れたり」、「然りニーチェと共に特にイプセンは理想的個人主義なり」<sup>39</sup> と述べている。斉藤野の人は魯迅の文章と親近性がある一人の明治時代の文筆家である。これについては伊藤虎丸、松久正義、中島長文、清水賢一郎の各氏が論じた。<sup>40</sup>

ノルウェーの研究者エリザベス・エイデは『中国のイプセン——イプセンからイプセン主義まで』の中で魯迅とニーチェ、イプセン及び中国五四運動について次のように指摘している。

中国でニーチェが認識されるのは部分的に日本の翻訳を通じてである。1907 年、魯迅はニーチェに感動して、その同じ論文[「摩羅詩力説」、「文化偏至論」陳注]の中で、イプセンに論及している。魯迅はおそらく日本の翻訳に基づいてニーチェに感銘を受けたのだろう。魯迅はニーチェの個人主義と因襲打破に感動した。イプセンとともに、ニーチェは中国の五四時期に注目を浴びている。中国でニーチェの著作は詳しく紹介されなかった。それは公正にいうと、中国ではニーチェのスローガン「すべての価値の価値転換」に興味を持たれ、「新青年」のような定期雑誌の方針にはよく似合っていた。<sup>41</sup>

五四時期においてニーチェのスローガン「すべての価値の価値転換！」<sup>42</sup> がイプセン主義とともに当時の反封建の啓蒙的思想武器として知識人に流行していたが、なお、イプセンの価値は女性の解放にあった。10 年前、魯迅が明治の時代精神の下で受け取った「文明批判者」ニーチェ、イプセンは、五四時期の思想界において十分理解されていなかった。

中国の研究者張釗貽氏は「初期魯迅のニーチェによる影響を考える——魯迅とブランデスの『ニーチェ論』との関係についても兼ねて論ず」<sup>43</sup> の中で次のように述べている。

当時の日本知識界及び「美的生活」についての論戦によって、魯迅のニー

チェは高山樗牛、登張竹風、姉崎嘲風等のニーチェと少なくない共通点があり、ニーチェに反対した論者の観点と関係がない。だから魯迅の触れたニーチェ（あるいは彼が選択して受けたニーチェ）はただ高山樗牛達のニーチェよりほかはない。（中略）魯迅は「文化偏至論」の中で、高山樗牛と同じようにニーチェにより個人主義の文化批判を引き出し、たびたびニーチェをイプセンと共に同列に論じている。また「摩羅詩力説」でニーチェ精神により反抗的詩人に一貫して、詩人を社会文化に対して批判する主力としている。魯迅が「文明批評家としての文学家」（高山樗牛著。筆者注）を読んだことがあるかどうかについて証明できないけれども、しかしそれと「文化偏至論」の構成、ニーチェ及び文化批評に対する観点において相似がある。これは否定できない。

魯迅は日本における留学期中多くの西洋文化思想に触れていた。彼は一般の清国留学生より敏感に、日清戦後及び日露戦争前後の日本における時代精神の中にある革命性を感じていた。彼にとってイプセンは、ニーチェと共に、世俗に流されて自己を失うことなく、強硬な個性を持っており、「超人」のような英雄と戦士であった。魯迅のイプセン受容も、その時代の刻印が深く押されていると言えよう。換言すれば、これは伊藤虎丸氏の指摘する、魯迅と日本の明治30年代文学との「同時代性」<sup>44</sup>であったと言えるのである。

## 6. おわりに

留学期の魯迅にとって、イプセンはキルケゴールの解釈者であり、ニーチェと共に意志の力を有し、世俗に反抗する代表であった。魯迅は「社会の敵」のストックマンのような人間に共感を覚えた。竹内好はかつて「彼（魯迅—陳注）は明治の末に日本へ留学し、日本語を通じて、またドイツ語を通じて、ヨーロッパの近代文学を吸収した。この吸収の仕方は、かなり個性的であった」、<sup>45</sup>と述べている。竹内氏の述べるように、確かに魯迅は「個性的」態度で、明治時代のイプセン・ブームから個性主義者のイプセンと世俗に対する反抗者のイプセンを読み取っていた。彼は明治の時代精神に気づき、民族的な精神の重要性を認識し始めている。その中に自分の個性的なものも注入している。ただし、この個性はある程度において、優秀な中国知識人として持っている中国伝統文化精神であったと言える。魯迅はまさしく伝統的憂患意識（社会責任感）と士大夫としての指導者意識により「人々の精神を改革」し、「人間の国」を建設

しようとした。それ故魯迅は、理想の人格が備わっているストックマンのようなイプセン像を打ち立て、またそのイプセンを手本にしたのである。他方、伝統的文化の士大夫的な性格により、新しい女性のノラの価値はまだ認識できなかった。

帰国した後に魯迅は、中国の現実に対する理解を深めるに従って、イプセンの受容がさらに深く、広くなってくる。中国知識人がノラを自己覚醒した女性と見なし、彼女の家出の勇敢さを激賞しているとき、魯迅は、「ノラは家出してからどうなったか」（1923）と世に問い、小説「傷逝」でこの質問に樂觀を許さない答えを与えた。一方、イプセンは晩年の告白において、「わたしは人々が一般にそうお考えになりがちなような社会哲学者というよりは、むしろ、より多く詩人でした」<sup>46</sup>と述べている。イプセンは戦闘の後、最終的に民衆と折り合いをつけた。1928年、魯迅はイプセンの以上の態度を「勝利の悲哀」であると指摘した。<sup>47</sup>

## 注

- 1 ①「先の明治40年、「春柳社」により本郷座で『黒奴吁天録』の上演された年、日本留学中の魯迅は「文化偏至論」を書き、これは翌明治41年8月、清国人留学生により発行されていた文芸雑誌『河南』7号に発表された。これはイプセンだけを論じたものではないが、その中でイプセンについてもふれ、人間の価値、個性の尊厳を説き、社会の醜悪を暴き戦った作家であると述べられている。これは中国語によってイプセンについて言及された最初の論評だといわれている。」中村都史子『日本のイプセン現象 1906—1916年』九州大学（1997）p415
- ②「1908年、魯迅が東京で発表した二篇の論文「摩羅詩力説」「文化偏至論」には、そのイプセンの名を見ることができる。これはまた中国におけるイプセン紹介の嚆矢でもあった。」清水賢一郎「国家と詩人——魯迅と明治のイプセン」（『東洋文化』74号所収（1994））本文の中で用いる清水氏の論文は全て本論文を指す。
- ③「最初にイプセンを中国の読者へ紹介した人は魯迅である。1907年に書いた「摩羅詩力説」「文化偏至論」には、魯迅がイプセンをキルケゴールの解釈者と称していた。」鄭宇紅「イプセン主義」（『信陽師範学院学報』所収（2003））
- 2 北岡正子著、何乃英訳『摩羅詩力説材源考』北京師範大学出版社（1983）、伊藤虎丸、松永正義「明治三〇年代文学と魯迅——ナショナリズムをめぐって——」『日本文学』29号（1980）、伊藤虎丸『魯迅と日本人——アジアの近代と〈個〉の思想』朝日新聞社（1983）中島長文『ふくろうの声 魯迅の近代』平凡社選書（2001）
- 3 前掲、伊藤虎丸『魯迅と日本人——アジアの近代と〈個〉の思想』、前掲、清水賢一郎「国家と詩人——魯迅と明治のイプセン」
- 4 魯迅著、竹内好ほか編訳「呐喊自序」『魯迅選集 第1巻』岩波書店（1986）p7

- 5 許寿裳「我所認識の魯迅」（『中国現代作家與作品研究資料魯迅卷』初編人民文学出版社（1954） p 372
- 6 ノート検査事件：仙台医学専門学校で藤野先生は魯迅の解剖学ノートを添削指導した。学生たちの間に藤野先生が予め魯迅に試験問題を漏らしていたのではないか、という悪い噂を立てる者がいた。作品「藤野先生」の中でクラスの幹事がノートを検査しに来たことを書いている。実際には、魯迅の解剖学の試験成績は落第だった。幻灯事件：「藤野先生」によれば、魯迅は仙台医専で、ロシアのスパイを働いた中国人が中国人観衆の見守る中で日本軍兵によって首を切られる幻灯を見た。それに衝撃を受けた。
- 7 前掲、魯迅著、竹内好ほか編訳「呐喊自序」 p8
- 8 周作人「魯迅の故家」 p 293「日常生活」（『周作人自編文集』河北教育出版社所収〈2001〉）、「魯迅在东京的日常生活，说起来似乎有些特别，因为他虽说是留学，学籍是在独逸语学校，实在他不是在那里当学生，却是在准备他一生的文学工作。」 p 313「看戲」「1907年春天……到春木町的本乡座，看泉鏡花原作叫做《风流线》的新劇。……还有一次是春柳社表演《黑奴吁天录》，……他那时最喜欢伊勃生（《新青年》上称为“易卜生”，为他所反对）的著作，……」
- 9 Kwok-kan Tam *Ibsen in China 1908-1997: A Critical-Annotated Bibliography of Criticism* The Chinese University of Hong Kong 2001 P35
- 10 『開拓者』1巻6号(1906)
- 11 ブランデス著、布施延雄訳『ヘンリク・イプセン』新潮社(1926) p35
- 12 Georg Brandes, *Henrik Ibsen. Bjoernsterne Bjoernson. Critical Studies.* trans. By Jessie Muir, intro. by William Archer. Heinemann
- 13 『早稲田文学』28号(1892)「Ibsenは其の友 Georg Brandesの記する所によれば熱情の厭世家おり彼は社会の現象を厭悪するものなり然れども社会の諸弊は現代又は将来の精神を革新することによりて終には改善せらるべきを信ずるものなり彼以為らく社会の疾病を救ふ良剤は個人主義の発達なりと…」
- 14 デンマーク（丁抹とも書く）三省堂「大辞林 第二版」より
- 15 中村都史子『日本のイプセン現象 1906—1916年』九州大学（1997） p 5。また森鷗外『鷗外全集 第四巻』（1972）岩上書店に収められた「牧師」によると、確かに（五幕の）第一幕だけである。
- 16 前掲、「魯迅の故家」 p 315「画譜」（『周作人自編文集』河北教育出版社所収〈2001〉）「魯迅の日本における生活は、壬寅（1902）から己酉（1909）に至る前後八年の長きに及んだ。しかもその中間の二、三年は、中国人が一人もいない仙台に住み、日本の学生と一緒に暮らしたので、彼の語学力は留学生の中でも相当なものであった。だが彼は日本文学には少しも興味を感じず、ただ夏目漱石だけに感心して、彼の小説「我輩は猫である」「漾虚集」「永日小品」から、無味乾燥な文学論まで全部買込んだ。さらにその新作「虞美人草」を読むために、『朝日新聞』を購読し、その後単行本が出版された時、又一冊買った。漱石の外は、ロシア小説を主に翻訳していた長谷川二葉亭と、南欧文学を紹介する上田敏博士に注目していた。」

- 17 『早稲田文学』7巻（1906）
- 18 ブランデスの『ヘンリック・イブセン』の独訳の出版年は、挙げた URL②は1905年、URL③は1906年、URL④は1908年。
- 19 前掲、周作人（『周作人自編文集』河北教育出版社所収〈2001〉）「江南堂」p325、「徳文書」p327。周作人「再び東京」p36「魯迅の国学と西学」p46-47（『魯迅の青年時代』河北教育出版社所収〈2001〉）
- 20 陳漱渝主編『世紀之交的文化選採』湖南文芸出版社（1995）p127
- 21 魏韶華「克尔凯郭尔之影与鲁迅的易卜生观」（『魯迅研究月刊 第11期』所収〈2002〉）
- 22 姚錫佩「現代西方哲学在魯迅蔵書和創作中的反映〈上〉」（『魯迅研究月刊 第10期』所収〈1994〉）

<http://buchantiquariat.com/buecher/linuxuche.php3?suchstr=%20Kierkegaard%20%20Soeren>

**Kierkegaard .. Hoeffding, Harald. Soeren Kierkegaard als Philosoph.**

[Kierkegaard] Hoeffding, Harald. Soeren Kierkegaard als Philosoph. 2. durchgesehene Auflage. Stuttgart: Frommann, 1902. 167 Seiten mit einer Abbildung als Frontispiz. Leinen. 352 g  
Frommanns Klassiker der Philosophie III. hrsg. von Richard Falckenberg. Uebertragen von A. Donner und Chr. Schrepf. Mit Bildnis als Frontispiz. - Einbandkanten berieben, Ruecken gebraeunt, etwas locker in den Gelenken, wenige Anmerkungen mit Bleistift. Bestellnummer

- 23 枅形公也 <http://kierkegaard.cs.kyoto-wu.ac.jp/masugata/juyoshi1.html>
- 24 前掲、姚錫佩「現代西方哲学在魯迅蔵書和創作中的反映〈上〉」。また姚錫佩『滋养魯迅的斯堪底纳维亚文化』中国文聯出版公司（1991）
- 25 前掲、中村都史子『日本のイブセン現象 1906—1916年』p52-53  
「逍遙はイブセンに関する最も早い時期の言及「ヘンリック・イブセン」（『早稲田文学』27号、明治25年）は、日本で実質的にイブセンについて書かれた最初の文章である。即ち逍遙は英国の雑誌書籍により、イブセンの名前がその登場頻度を増し、更にイブセンそのものを論じた文章に遭遇することに注目し始めたのである。明治25年（1892）『早稲田文学』25号の「時文評論」の中で逍遙は海外文学の紹介を担当し『フォートナイト批評』（逍遙訳題名）誌中のアーチャーの英国劇壇についての記事を読んだところ、再びイブセンの名前に出合った。」
- 26 上田敏「イブセン」（『早稲田文学』7巻所収〈1906〉）
- 27 鄭曉芒「魯迅の思想矛盾探源」（『魯迅研究月刊 第2期』所収〈2001〉）を参考
- 28 魯迅は「文化偏至論」の中で「個人」という言葉を論じるときに、その段落の中でキルケゴールとイブセンをドイツのシュチネル、ショーペンハウエルとともに個人主義の先覚者として挙げる。そして「社会の敵」を紹介する。
- 29 1902年4月、新派の座付作者花房柳外が「洋式演劇社」を結成し、『社会の敵』を上演した。前掲、清水賢一郎「国家と詩人——魯迅と明治のイブセン」。「足尾銅山鉍毒事件（明治33年12月）は大日本帝国の大汚点なり。之を拭はずして十三師団の陸兵と二十六万噸の軍艦を有する帝国の光榮は那邊にある、之を是れ一地方問



- 題と做す勿れ、是れ実に国家問題なり、（中略）内山鑑三は、日清戦勝により俄に<国民国家>として現前してきた近代日本の資本主義化と富国強兵、ないしは帝国主義化と満州進出の問題と拮抗しうる<国家問題>として事件を捉える。」
- 30 坪内逍遙は『早稲田文学』28号（1892）「イプセンの喜劇」の項で「人形の家」の粗筋を紹介した。
- 31 丸山昇『魯迅—その文学と革命』平凡社（1986）p39
- 32 前掲、魯迅著、竹内好ほか編訳「呐喊自序」p8
- 33 朱宗震『上海行政学院学報 第1期』（2000）
- 34 孔慧怡「字里行間：朱安の一生」（『魯迅研究月刊 第1期』所収〈2002〉）を参考とした。
- 35 中島長文「魯迅とエロス」（前掲、中島長文『ふくろうの声 魯迅の近代』所収）p79
- 36 前書中島長文「魯迅とエロス」p73、p79
- 37 前掲、清水賢一郎「国家と詩人—魯迅と明治のイプセン」
- 38 高山樗牛「高山樗牛齊藤野の人姉崎嘲風登張竹風集」（『明治文学全集』筑摩書房所収〈1977〉）p65
- 39 前書、p124、p121
- 40 前掲、伊藤虎丸、松久正義「明治三〇年代文学と魯迅——ナショナリズムをめぐって——」、中島長文「孤星と独弦——明治の日本と魯迅モザイクの断片」（『颯風 第33号』所収〈1997〉）、前掲、清水賢一郎「国家と詩人—魯迅と明治のイプセン」
- 41 Elisabeth Eide *China's Ibsen From Ibsen to Ibsenism* London, Curzon 1985, P51 Nietzsche had become known in China partly through Japanese translations; Lu Xun was impressed with Nietzsche in 1907, in the same articles in which he discussed Ibsen, and he presumably based his impressions on Japanese translations. Lu Xun was impressed with Nietzsche's individualism and his iconoclasm. As with Ibsen, Nietzsche also surged to the fore during the May Fourth days. Without going into detail about the interpretation of Nietzsche in China, it seems fair to say that interest in him based itself mostly on the catchword 're-evaluation of all values' a slogan excellently suited to the policy of a periodical such as *Xin Qing Nian*.
- 42 ニーチェ「理想者」（ニーチェ著、吉沢伝三郎編『ニーチェ全集 第13巻』所収〈1970〉）p237
- 43 『魯迅研究月刊 第6期』（1997）
- 44 前掲、伊藤虎丸『魯迅と日本人—アジアの近代と<個>の思想』p56  
「魯迅は、大づかみにいえば、十九世紀の西欧近代文明に対する<文明批評家>としてのニーチェ像を日本文学と共有した。今日ニーチェの十九世紀文明批判は<反近代>の思想といわれるが、しかしアジアの後進国だった日本は、第一次のニーチェ流行において、ニーチェから、結局は<反近代>ではなく、<近代>を受け取った。魯迅がニーチェから学んだものも、まさにヨーロッパ近代の精神だったから、この点でもおなじアジアの後進国の文学者として、魯迅と日本文学とは同じであった。」

- 45 竹内好「魯迅と日本文学」（竹内好『新編魯迅雜記』勁草書房所収〈1985〉）p86
- 46 イブセン著、原千代海訳『イブセン戯曲全集 第5巻』未来社（1989）p517。1898年の誕生日祝いにノルウェー女権同盟が女性解放運動の推進者として彼を讃えて聞いてくれた祝賀会におけるイブセンの挨拶。
- 47 魯迅著、丸山昇ほか編訳「『奔流』編校後記の三」（『魯迅全集 第9巻』学習研究社所収〈1985〉）p224、p225
- 「さらに数年後、ちょうど Ibsen が功成り名を遂げて引退し、大衆に和睦の手をさし伸べた」、「『人間』が第一か、『藝術の仕事』が第一か。この問題は、一生うちこんでのち、はじめて生まれ、また解答しうる問題である。一人で闘い抜くか、それとも、結局、みなに和睦の手をさし伸べるか。この問題は、一生闘ってみて、はじめて生まれ、また解答しうることである。不幸にも、Ibsen はあとの問題に解答を出し、『勝者の悲哀』を味わったのである。」